

作業のメガネ

村井真由美

介護老人保健施設 愛と結の街

作業科学研究第3巻の編集作業をしていると、県立広島大学の吉川ひろみ氏の寄稿より「作業のレンズ」と称した大きなメガネをかけているユーモラスな写真を発見した。作業科学を知る、学ぶということはまさにこの「作業のレンズ」を通して事象を見る状態になることであることを改めて認識した。

私は2003年に大学院を修了し、今の職場に就職した。理由は作業療法士が普通に勤務している場所で作業科学の知識を本当に生かせるかどうか身をもって実験したかったからである。大学院時代も非常勤の作業療法士として働いていたが疑問を持つことなく、現場が求めるままに動いていた。今の職場の作業療法士は私ひとりである。どのようにしていくか。

まず変わったことがクライアントを見る目だった。作業科学を知る前はまず疾患、障害ありき、いかにクライアントの障害を調べ、見解を述べるところから始まったのだが、作業科学を学び、一息ついた後は、不思議とクライアントがどこの誰で、どのような作業はできるが、どの作業が困難か、これからどのような作業がしたい、できるようになりたいと思っているのか、というように考えるようになった。過去の私の優先順位一番だった疾患や障害は作業遂行上のクライアントの問題として考える一因としての位置づけとなった。私のクライアントの評価や説明の切り口について同僚である理学療法士や言語聴覚士には若干違和感があったようだ。利用者中心の考えを元とした介護保険領域ではとてもやりやすい。今となってはこの見方を変えることはできず、たまに県士会等の事例研究等を聞くと不思議な、何だかいたたまれない気持ちになるようになった。これも作業のメガネをかけてしまったからであろう。

作業のレンズを通すと世の中の情勢も作業を通した見方になるような気がする。例えば、不況、失業の問題。テレビである国の政権が交代し、失業者が増えた、というニュースが流れた。画面には広場に集まる市民の姿が映し出されていた。仕事がないということ事態大きな問題である。市民の姿を見て思うのは、朝目覚めてからすること、行くところがないのはさぞかしつらいだろう、ということである。無職の人が犯罪を、というニュースを聞くと被害者のことを思うと同時に、容疑者はすることがなくてつらかったのかも知れない、とつい考えてしまう癖がついてしまった。それは私が大学院を修了して2ヶ月間無職だった経験から思うことである。忙しい日々から解放され、ウィークデーに繁華街に行き、昼まで寝、夜更かしし、という生活を送っていた。最初は楽しくて仕方なかったが次第に増えることはないが、減る一方の所持金、誰に何も言われぬ、頼られない生活を送ることは自分の存在がないような気持ちがしてきた。次第に気持ちはすさみ、自由生活に別れを告げ、就職した。たまに自由生活が恋しくなる時があるが、自分の存在がないようなあの何とも言えない恐ろしい気持ちはできれば経験したくないと考える。無職の日々は作業の意味を身をもって感じた貴重な経験だった。

作業のメガネは作業科学を知れば知るほどバージョンアップしていく。5年前の自分と今の自分を比べれば明らかに違うと認識している。これからどんなフレームの、どんな大きさの、どんなレンズのメガネに変化していくのだろう。メガネをかけることで作業を必要としている方の力になりたい、いい仕事がしたい、一作業療法士としてメガネ磨きに余念がない今日この頃である。